

聖書の物語と私たち 6

ヨセフ その1

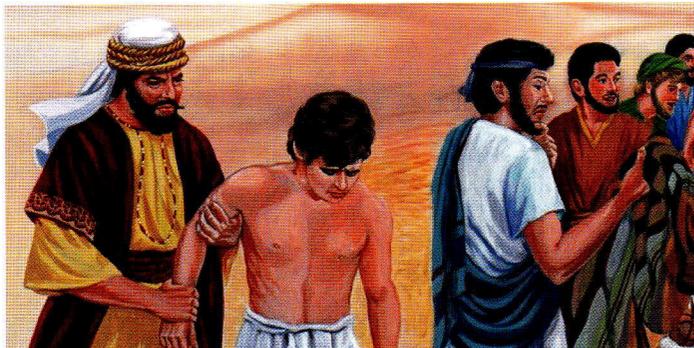
司祭パウロ鈴木伸明

創世記の最後の部分、第37章から50章には、四番目の族長となるヨセフの物語が書かれています。この物語は創世記を締めくくる物語として重要である上、出エジプト記への橋渡しとしての役割も持っていますので、3回に分けてみることにしたいと思います。

ヤコブには12人の男の子が生まれました。そのうち11番目の息子だったのがヨセフです。ヨセフは父ヤコブが年老いてから生まれたのでとてもかわいがられ、父から裾の長い晴れ着を作ってもらいました(37章3節)。この着物は、ヨセフはもう仕事をしなくてもよいことを示すものでしたが、それが兄たちの憎しみの原因となっていたのです。

ある時、ヨセフは夢を見ました。『聞いてください。わたしはこんな夢を見ました。畑でわたしたちが束を結わえていると、いきなりわたしの束が起き上がり、まっすぐに立ったのです。すると、兄さんたちの束が周りに集まって来て、わたしの束にひれ伏しました』(37章6節から

7節)、『わたしはまた夢を見ました。太陽と月と十一の星がわたしにひれ伏しているのです』(37章9節)。これを聞いて兄たちの機嫌はますます悪くなってしまいました。そして兄たちはヨセフを『夢見るお方』(37章19節)と呼び、憎しみを増していったのです。



のをいいことに、ヨセフを穴へ放り込み殺そうとしました。命を取ることは反対だった長兄のルベンはヨセフを父のもとへ帰したかったのですが出来ませんでした。ところがそこをミディアン人の商人たちが通り

ヨセフ

が17歳の頃、父ヤコブの指示で羊を飼っている兄たちとちろへ出かけたときのことでした。憎しみが頂点に達していた兄たちは、父の目の届かない

かかって、ヨセフを穴から引き上げ、エジプトへ向かっていたイシマエル人に銀二十枚で売ってしまいました。こうしてヨセフはイシマエル人に連れられてエジプトへ到着したのでした。

エジプトでヨセフは、エジプトの王ファラオの宮廷の役人で、侍従長を務めていたエジプト人ポティファルにイシマエル人から買い取られ、奴隷として働くことになりました。しかしヨセフのもとには主が共におられて、主が彼のすることをすべてうまく計らわれたので、ポティファルは家の管理、財産のすべてをヨセフに任せました。

ところがある日、とんでもないことが起きました。顔も美しく、体つきも優れていたヨセフを、主人ポティファルの妻が誘惑してきたのです。ヨセフはそれが大きな悪であることをよく知っていましたので、聞き入れはしなかったのですが、ポティファルの妻は主人に嘘の報告をし、ヨセフが悪を働いたと伝えてしまいました。主人は怒り、ヨセフを捕らえて、王の囚人をつなぐ監獄に入れてしまいました。ヨセフは兄たちに裏切られ、今度は主人の妻の仕業によって信頼を失ってしまったのでした。

しかし監獄の中でも主が共におられました。『主がヨセフと共におられ、恵みを施し、監守長の目にかなうように導かれたので、監守長は監獄にいる囚人を皆、ヨセフの手にゆだね、獄中の人のすることはすべてヨセフが取りしきるようになった。監守長は、ヨセフの手にゆだねたことには、一切目を配らなくてもよかった。主が、ヨセフと共におられ、ヨセフがすることを主がうまく計らわれたからである』(39章21節から23節)。ヨセフに対する神様の恵みは絶えることがなかったのです。

その後、エジプト王に過ちを犯してしまった給仕役と料理長が監獄に入れられました。そこで夢を見た二人はその意味がわかりませんでした。ヨセフはそれが二人の将来に対することだと解き明かします。果たしてその通りになり、給仕役は職務に復帰させられ、料理長は殺されてしまいました。ヨセフはその際給仕役に、幸せになった時には自分のことを思い出してくれるように頼んだのですが、給仕役はヨセフのことを忘れてしまいました。ヨセフはさらに2年間監獄での生活を余儀なくされたのです。

(川越キリスト教会牧師)